

2024年2月10日(土)～3月27日(木)

静岡県立美術館 | 静岡県静岡市 |

伊藤 鮎 | 静岡県美術館学芸員 |

「天地耕作」は、旧引佐郡（現・静岡県浜松市）を拠点に活動した村上誠、村上渡、山本裕司の3名による美術制作プロジェクトである。彼らから展覧会の知らせを受けた時は正直驚いた。なぜなら1988年に結成したこのコレクティブは、2003年に活動を終了し、私有地などの野山を舞台に作られた耕作物と呼ばれる作品は制作後に解体・焼却され、残っているのは記録写真くらいだからである。また近代的な美術館や展覧会といった制度を疑い、

民俗学などの他分野とも積極的に接続しながら芸術の根源を探ってきた天地耕作が、美術館、しかも静岡では本丸的存在である県美で回顧展とは、依頼があつたにせよ彼らの主義主張に反することはないのであると。

実際に足を運んでみると身勝手な心配は無用、己の浅見を恥じた。展覧会の大部分は、天地耕作の15年にわたる活動の軌跡を、記録写真でプロジェクト毎に振り返るものだった。壮大なスケール感と神秘的な魅力を伝える記録写真のほとんどは、写真家としても活動を続ける誠氏が撮影したものである。作品の実体なき今、作品と同等の価値を持つ記録写真の質の高さに改めて圧倒されたが、大判出力した写真は水彩用ロール紙や、井桁状に組まれた木材の上に展示されていた。単なる演出だったかもしれないが、「作品」のための展示壁や美術館という空間に飲み込まれまいとする、天邪鬼な彼らのささやかな抵抗にも思った。記録映像や制作メモなどのアーカイブ資料も充実していたが、注目すべきはフィールドワークを記録した年表だった。基本的に非公開放制作、一定期間が過ぎると解体されるという

特殊な制作スタイルの下敷きには、地域の祭や民俗芸能、反芸術からの流れを汲む美術への関心があるが、彼らが何を参照し、影響を受け、制作に活かしていたのかという思考の根幹が垣間見え、ベールに包まれていた謎が明かされていくようだった。

そして良い意味で裏切られたのは、会場内に新作インスタレーション『白蓋』が設置され、美術館の裏山では野外作品が制作されたことだった。切り紙細工や美術全集が刻まれた天蓋を持つ『白蓋』は、地元北部遠州や奥三河に伝わる伝統芸能の花祭りから着想を得たもので、祭りの場で神が宿る場所を仮設的に作り出すのと同様、美術館という空間を異化する効果があつた。野外作品は未完のプランを約20年を経て実現させたもので、谷田古墳群の近くという自然と人間の営みが交差する場所の特殊性を読み、木や土、縄などを組み上げた「墳墓（山本）」と「産土」（村上兄弟）という対比する耕作物を作りあげた。そして会期終盤には野外作品を舞台に身体遊戯（パフォーマンス）が実施された。流浪の旅芸人である傀儡子を演じた村上兄弟と、死者への祈りを野生的に演



パフォーマンス『遊芸』の様子(2023年3月24日)

じた山本はここでも対極を成していたが、クライマックスで耕作物が倒された瞬間、彼ら3人を次に目にすることはあるのだろうか、祭りが終わった時のような物悲しさを感じた。生と死、過去と現在、内と外など、時間や空間を自由に行き来してきた天地耕作は、祝祭に顔を出すマレビト（異人・来訪神、そのものであり、始まりと終わりを繰り返すことが可能なシステムをプロジェクト自体に内包していたということに気が付かれた。そうした点で、展覧会というある意味仮設的で祝祭的な場に、彼らが再び姿を現したのは極めて自然なことだったのだ。